鳥取の民話

29

収録・解説　酒井董美（ただよし）

語り手　山口忠光さん
（明治40年生まれ）
昭和62年8月20日収録

三朝で見つかった単独伝承の話

喜助とおさん狐

（東伯郡三朝町大谷）

あらすじ

昔、喜助という貧乏な人がおった。

「じき正月だが、もち米を買う銭もない」と嫁さんが言う。喜助は「思案がある。おさん狐（ぎつね）をだまいて、銭もうけをしたらぁ」と言った。

それから、奥の山へ入って「おさん、出てこーい」と言っていると、狐が女に化けて出てきた。

「嫁を頼まれとるけえ、世話せんならん。嫁になってごせ。おれが家へもどって、朝になったらその家から帰ってええ、嫁になってごしぇ」

「そのぐれえならなってあげる」

「頼んだぞ。時間におれが迎えに来る」

喜助は、嫁を頼まれていた家へ行って「嫁ができた。ちいと銭がいる。五円もらわにゃいけん。銭さえできりゃあ、あさってでも連れて来る」というと、その家では銭を持って来た。

喜助は銭はわが懐へ入れ「かかあ、山ゴンボの根と蕗（ふき）の根をちいと取ってこい」と嫁さんに言いつけて、おさん狐に「あさって嫁に行ってくれ」と頼んだ。

嫁さんに準備させておいて、喜助はおさん狐をそこへ連れて行った。家の人は「いい嫁さんを世話してごしなった。うれしいこっだ」と酒や肴（さかな）でもてなした。

しかし、肝心の狐は、おいしそうなものが並んでいるけれど、食べるわけにはいかない。いいかげんなところで喜助が「いぬるから嫁さんを頼む」と自宅へ戻ってしまった。

喜助は嫁さんに「寝るけえ。嫁の家から、おれがだまいて狐を連れて行っただとぐずって来るかも知らんけえ、そこらをうまいこと話さにゃいけんど」と言って寝た。

あくる日、その家から「喜助さんはおんなるかや」と言ってやって来た。

「喜助さんは、ひどい人だ。ようもだまいて。銭の5円も取って狐を嫁に世話してからに。銭もどいてもらわにゃいけんし、謝ってもらわんにゃいけんが」と言う。

「おとっつぁんは、こないだごろから、『熱があるようでショウカンになっただも知らん』ちって、あれが効くこれが効くって言いなはるだけえ、草の根を掘ってきてせんじて飲ませまして、枕元へこのごとくにせんじたかすがあるだが。いま、熱を冷やいてあげよるところだ」と言ったそうな。

「そがにも言いなはら、そがなだわ。うちのもんが狐にだまされたんか、残念なけどしかたがない。すまなんだなあ」と言ってしまった。

そいから喜助さんが「かかあ、うまくいっただらが。餅げでも何でも5円ありゃあ、だいぶん買えるけえ」と言って、よい正月を迎えたという話だ。昔こっぽり。

イラスト・福本隆男

解説

これは珍しい話である。関敬吾『日本昔話大成』で調べても、この話の戸籍はない。三朝町で見つかった単独伝承の話というべきものである。

（元鳥取短期大学教授）

（水曜日に掲載）

鳥取県立博物館HP「鳥取の民話」コーナーで語り手の音声が聴けます。